

深大寺恋物語 20 周年記念 文芸鼎談文字起こし

2025 年 2 月 8 日（土） 調布市文化会館たづくり 12 階

司会：大変長らくお待たせいたしました。只今より深大寺短編恋愛小説公募事業 20 周年企画文芸鼎談を開会いたします。私は、司会を務めます深大寺短編恋愛小説実行委員会の嵐裕子と申します。よろしくお願いいたします。

手話通訳は調布市登録手話通訳者の皆さんです。開会に先立ちまして、皆様にお願いがございます。会場内写真や動画の撮影はご遠慮ください。また、携帯電話、スマートフォンは電源を切っていただくか、マナーモードの設定をお願いいたします。本日の鼎談は、調布市民放送局様のご協力のもと、後日 YOUTUBE で公開をいたします。

また、ジェイコムチャンネルの調布市民放送局様制作番組等でも放映をされます。

それでは開会にあたり、20 年間、最終審査員としてもお力添えをいただいてまいりました調布市長長友貴樹様より一言ご挨拶を頂戴いたします。市長、よろしくお願いいたします。

長友市長：皆さん、こんにちは。市長の長友でございます。深大寺恋愛小説、2005 年、平成 17 年から今まで続いてきたわけですが、昨年を一つの区切りとして、私も皆様と同様に寂寥感を禁じ得ないわけですが、短編恋愛小説を立ち上げていただいた実行委員会の皆様方に、まず御礼を申し上げたいと思っております。

長い間、本当にありがとうございました。

終わってよかったということではないんですけれども、終わってわかったということがあります。というのは、今日の、こんなに場内満員になるように、皆さんが熱心に詰めかけていただいたような、どれだけこの短編恋愛小説が市内の方に愛されてきたのかということがしみじみわかったということでもあります。

この間も、新年会のシーズンで渡り歩いている時に、あるところで、あれ残念ですねと言われてまして、復活しませんか？ 今度いつ頃とか言われて、いろいろな考え方があると思うんですが、我々調布市としては、行政としてこれをやろうというような感覚がありません。

この実行委員会のように、市民の方、または団体がそういう情熱のもとに立ち上げていただいたら、本当にできる応援は力いっぱいさせていただきたいと思っておりますけれども、今後、自然発生的にそのような話が出てくれば、また我々行政としてもありがたく、うれしいものだのと、そのように思っているところでございます。

長い間審査に当たっていただきました 3 人の方から、今日は鼎談をいただくということで、村松さん、井上さん、清原さん、また歴代の審査員の皆様方に心から感謝を申し上げますとともに、よろしくお願いいたします。最後に、生成 AI が小説を既に書く時代になっているようでございます。

私はそのような作品が人々に感動を呼ぶことはあると思います。あり得ると思います。ただ、

それをどう考えるかですけれども、少なくとも私個人は、それで、機械が、最新技術が、小説を組み立てるという陰で、やはり言葉を紡いで、そして人々にいろいろな感動を与える人間の営みが失われていくとしたら、ばかなものだ。と、個人的には私は思いますが、そのようなことに対しても示唆をいただくような小説または文学に対して、愛情のこもったお話が今日は聞けるものとして、その時間帯は他の仕事を断って、ここにいらっしゃる皆様方とともに、そういうような文学のあり方とか、みんなでの楽しみ方をお話をさせていただければまことに幸甚と申し上げて、冒頭に当たっての御挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

司会：長友市長、ありがとうございます。

それでは、本日の登壇者を御紹介いたします。深大寺短編恋愛小説公募事業の最終審査員を務めてくださいました直木賞作家の村松友視先生、同じく直木賞作家の井上荒野先生、日本ペンクラブ会員、清原康正先生、そして深大寺短編恋愛小説実行委員会実行委員長吉井秀治です。進行は第6回公募事業で審査員特別賞を受賞された清蘭子さんです。皆様、ご登壇ください。

清：本日の進行役を務めます清蘭子と申します。ご紹介にありましたとおり、2010年の深大寺恋物語で審査員特別賞をいただきました。受賞に大きな勇気をいただき、昨年「夢みるかかるとご飯つぶ」というエッセイ集でエッセイストとしてデビューさせていただきました。本日はご恩返しの機会をいただき光栄でございます。

皆様と一緒に先生方から小説文芸について学びたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは早速、先生方とこの深大寺恋物語の関わりについて伺いたいと思います。2004年から深大寺地域の活性化を目指し創設されたのが、この深大寺恋物語でございます。先生方はどのような思いを持って選考委員をお引き受けくださったのでしょうか。まず、村松先生からお願いできますでしょうか。

村松：調布に金沢さんというしたたかな人がいらっしゃいまして、その人からまず、ドスのきいた声で電話がかかってきて、それでその電話。講演を依頼されたんですけれども、その依頼の仕方がもう、ノーという返事はないんだよというような感じの説得力があるんですね。

それで、ちょうどこの会場でやったんですけれども、そのとき金沢さんという方と初めてお会いしたんですけれども、私もその金沢さんの感触から、私も編集者体験があるものから、編集者の大先輩だと思い込んでしまったんですね。それで大先輩から頼まれてノーという返事はないというのが当たり前で、その講演会にはやってきたわけなんですけれども。

そのときに、深大寺を軸とする恋愛小説の賞を設定するような、しないような、何か。そう

なったらよろしくね」というと、これがまた、ノーという返事はないという感じで言われまして、それで、なし崩しにというとおかしいですけども、金沢さんに脅える形で、よく言えば金沢さんとの縁によって調布市へ導き寄せられて、それで当たり前のような感じで、選考委員の一角に名を連ねさせていただいたと。本当に偶然というか、人にビクビクするこの性癖がこの賞に導いたみたいな感じで。

清：調布というか、この深大寺地域に何かかわりがあったということなんですか。

村松：この町にはねえ、関わりはまったくなかったですねえ（会場笑）。深大寺も来たことがなかった。だから全く無縁なんだけれども、何しろノーという返事はない。とにかく引き受けて。

清：不思議なご縁ですね。井上先生は。

井上：私はその時、20年前のことだから43か44で、私、実質的には本当に小説家としてちゃんとやっていけるようにプロって自分で自覚できるようになったのが40歳ぐらいの時だったので、それで3年目か4年目ぐらいだったんですよね。まだ大きい賞ももらってなくて。初めて、やっぱり金沢さんから電話をいただいたんだと思うんですけども、私はそんなに会ったこともなかったので、別に恐れてはいなくて。それで、何かの選考委員を頼まれるということが、私にとっては初めての経験で、ちょっと嬉しかったんですね。なんかちょっと、一人前の作家として認められたみたいな感じで。だからすぐお引き受けしますって言ったんですけど、でもちょっと心の中では、私が調布に住んでいるからだよねと思っていたんですね。私、12の時から調布に住んでいて、家族で。その時も賞の選考委員の打診をいただいた時も、小島町に住んでいたのも、深大寺にはもう本当に村松さんよりもずっと縁があったので、その地域的な問題で選ばれたんだなって思っていました。で、さっき控え室で言われたんですけど、何か、私がその時に皆さんのいるところで、金沢さんに、私がこの先直木賞を取れなくてもクビにしないですよと言ったらしいんですよ。まあ、取れたから良かったですけども、そういういきさつでした。

清：清原先生は、途中の第6回から審査員を務めていらっしゃいますが。

清原：そうなんですけれども、今日そちらにいる、5回まで務めていらっしゃった藤田三男さんと以前から顔見知りというか、彼が河出書房と、そのあと木挽社に行って、いろいろ、何だったかな、昭和文学の風景とか、それから日本文学アルバムなんかを編纂なさったときに、ちょっとお手伝いしたようなことがあって、顔見知りだったので、その方がここでエッセイ教室をなさって、それで、先ほどの村松さんの話じゃないですけど、僕も金沢さんに一

番最初にある作家の講演を頼まれまして、初めて調布に来たということで、そこから翌年かな。2回ばかり来て、何か講座を持ってくれませんかと言われて、歴史と文学のはざまみたいな、歴史はこうだよ、小説はそれをどう描いているか、という、そういうことをずっと話していて、藤田さんとも控え室でお会いしていたら、急に、5回やったんだけど、次から君やらないかという、替わってくれないかと言われてまして、ああ、と思って。それで10枚ぐらいの選者というのは、随分前になりますけれども、山梨日日新聞の読者小説賞というのがあって、これも10枚なんですね。それから、今でもやっております朝日カルチャーの小説教室、これも大体10枚から20枚のあれをずっとやってきましたので、こういう、地域で公募する作品というのはどういうものがあるんだろうな、それから、事務局の人と会って、この熱意といいますかね、活性化のためにこういうあれを立てたんだよというのを伺って、非常にこれまでの選者をやってきた体験というのが、生かせるんじゃないかということで務めさせていただきました。そういうことです。

清：ありがとうございます。この深大寺恋物語は深大寺とその周辺を舞台にすることという規定があるんですけども、数々の応募作を読んでいく中で、この深大寺地域の魅力、気づかれた魅力は何だったのでしょうか。井上先生、お願いします。

井上：そうですね。あの、本当にいろいろ詰め込まれているんですよね、深大寺ってね。亀がいるし、達磨もいるし、あと縁結びの伝説というのも、私、この賞の選考を始めるまで全然知らなかったことだし、ナンジャモンジャの木があってとか、まあいろいろいろいろあって。だから普通のお寺だとかうはいかないと思うんですよね。

それってちょっと深大寺という特殊なところがあって、お蕎麦屋さんが周りにいっぱいあるし、隣に植物公園があって。植物公園の周りも野川が流れていて、すごくちょっと都内としては珍しい緑に溢れた土地で、よくちょっと何か都会のエアポケットみたいな、こんなところあるんだねって、くる人がいるようなところなんですよ。それから、鬼太郎なんかもいてね。いいところだと思いますが、ただ、書いてくる方はたくさんありすぎて、全部詰め込もうとして大変なことになっていたりとか、まあそういうのもありましたけれども、でもいっぱい書きどころはあったんじゃないかなというので、そういうふうに思いました。

清：清原先生、いかがですか。

清原：初めて深大寺に来たときに、金沢さんから頼まれて、15年以上前になりますかね、第1回の。作家の講演に来たときに初めて調布に来て、そのときにその後で深大寺に行ったのかな、それからずっとそのときの印象というのが、緑の濃厚さといいますか、緑がすごくきれいで、水が流れてて、そういう雰囲気の中にお寺があって、それと、それを小説として書くときに、信仰としてのお寺というのがありますよね。門前くぐって本堂行ってお参り

する、こっちがわで国宝の仏像を見るとか、そういう信仰としての場所ということと、それから出ると、ずらーっと蕎麦屋さんとお土産さんが並んでいる、そういう観光としての場所という、この2つがギャップなく渾然一体になっている場所だなという感じがして、それを皆さんがどういうふうに描いてくるのかなということにすごく興味がありました。もちろん調布に住んでいらっしゃる方、都内に住んでいらっしゃる方は、深大寺まで取材にこれるわけですが、たとえば、それ以外の広島とか地方の方々と、おそらく深大寺には来ていないだろうけど、今、幸いなことに、パソコンで細部まで見ることができるわけですね。行かなくても場所と雰囲気はわかるだろうと。そういう方がそういう信仰と観光とのギャップにある深大寺、現代の深大寺というところで、どういうふうに主人公を立たせるかという興味がありました。

清：ありがとうございます。村松先生、いかがでしょうか。

村松：今のお二人の方と似たようなものなんです。「聖」と「俗」といいますか、例えばそれを深大寺というものと、それから世間的なにぎわい。江戸時代から割と観光名所みたいな部分もあったようなことを聞きますし、その2つが合体化して、しかもちょっと人々の住んでいるいわゆる街というものと、ちょっと離れた形でエリアを形成しているという、何か聖と俗が入り交じっている空間で、しかもさっき井上さんが言われたように、次々と挙げていくと、いろいろな小説の取っかかりになるものがあるんですね。ですから、これだけたくさん小説のバネみたいなのが転がっている場所もありないんですけれども、そのバネがありすぎて、贅沢すぎて縛りになってしまうというか、要するにそれを超えなきゃならないし、それを使い過ぎちゃうと小説として自分から離れてしまうという、非常になんか厄介な賞なんだなというふうな感じもありましたね。それと同時に、縁を作者が書こうとして自分との縁を刻むには割となじみやすいテーマであり、エリアかなと思いますから、その2つの聖と俗もにじみ合っている。これも二律背反みたいになりかねないのが滲んでいるわけですから、それから書き手がやりにくいやりやすいというものににじみ合っている、そんな場所だと思いました。

清：すごく面白いですね。第15集の時に、お二人は深大寺恋物語の規定通りに小説を書こうとされたと思うんです。そのときはどこを絞ったのか、どういうふうに考えて書いたのか伺います。

村松：それちょっと僕から言わせていただきたい。僕はこの企画には大反対したんですね（会場笑）。角田さんとか井上さんとか、今をときめく作家に交じって、もうそろそろ小説は難しいかななんて思っている僕が、そこへなんで巻き込まれなきゃいけないんだというふうに思っ。イヤイヤ書いて。それで目次を見て、やっぱりなあというふうに思いました。

やはり、今輝いている人は輝いているものだと思う。何か思い知らされたような。僕、今の15回ですか。あれは嫌な記憶の残る号でしたね。

清：そんなそんな。井上先生、いかがですか。

井上：そんなことないですよ。ニコニコされていたじゃないですか（会場笑い）。あれは、でも、私が言い出したんですよ。15回。それまでずっと15回選考やってきて、やっぱりまず一つは難しいんですよ。10枚、10枚で小説を書くという、しかも深大寺を入れるという縛りがある。ものすごく難しいのではあるんだけど、あまりにもみんなどこかで聞いたようなお話を書いてくるので、それをちょっとプロが書いたらこうなるというのをやろうよと言って、私、江國さんと角田さんと、当時まだ東京に暮らしていたから、月に1、2回会うぐらい仲良かった友達なんです。もうそこは友情でやってよやってよと頼んで。で、今村翔吾さんがまだ直木賞とるちょっと前だったんですよ。めちゃくちゃ忙しかったんですけど、担当編集者が同じだったんです、あたしと。それで編集越しにお願いして電話かけたら、そのとき、断れるわけないやろみたいな感じで。引き受けてくださって。あれはやっぱりだから私もそれまで日頃いつも選評で、ものすごく私、誰よりも厳しくて怒ってばかりいたから、これは変なもの書けないぞと思って、すごく考えて、まあまあ、私は自分としてはちょっといいのを書けたな、と。私は植物公園をただ舞台にしたんですけれども、だから本当にそばとか縁結びとか達磨とか亀とか、あと初恋の人と偶然出会うとか、入れなくても小説になるんだよという、それを言いたかったんですよ。

清：ありがとうございます。次の質問なんですけれども、深大寺恋物語は20年を迎えた昨年、幕を閉じることとなりましたが、この20年の間、特に思い出に残っているエピソードがあれば教えていただけますでしょうか。清原先生、お願いします。

清原：第6回が私の最終選考の第1作目だったんですよ。先ほど言いましたように事務局の熱意だとかそういうこともあって、どういう応募作が来るのかな、皆さん、皆さんというのは応募の方ですが。プロではないわけですよ。どれだけ来るのかなと思って。僕の手元に来たのは17編。その中の「かなしい赤色、しあわせな闇色」。これが最優秀になったんですが、最終候補17編を読んだ時に、それが初めての、この賞の選考だったんですけれども、正直言ってこの賞レベル高いなと思いました。というのは、いろいろな制限があるわけですよ。さっき井上さんがおっしゃったように、枚数制限だとか、深大寺を必ず入れるとか、恋愛を入れるとかというようなことがあって、深大寺を入れるだけでも、かなり強引で、唐突に入れなくちゃいけないって、9枚目ぐらいにやっと深大寺が出てくるという作品もあるわけで。大体みんな深大寺を訪れるんですが、夢の中で深大寺に行ったという作品はあまり見かけたことがないですね。大体、深大寺行って、門前入って、お堂があって、ナンジャモ

ンジャの木があつてどうのこうのって、そこで井上さんが一番嫌う 20 年前の初恋の人と会ったなんていう、そういう強引なことで、深大寺を入れざるを得ないということで、深大寺あれこれあれこれ書いて、蕎麦の魅力だとかいろいろ書かなくちゃいけないと思って書くんでしょう。そうするともう枚数足りなくなつて、最後の方、本当に深大寺強引に行つて、それまでのストーリー展開は何だったんだ、ここでなんて深大寺が急に出てくるんやという作品があまりにも多いんだらうと思つていたら、この第 1 回目でそれが払拭されて。実に滑らかに深大寺を登場させている作品というのが当たつたんで、これはレベル高いんじゃないかなと。ところが正直言つて、次の第 7 回、8 回を読んで、ちょっとがっかりしましたね。やっぱり、ずっと書いてて、ここで深大寺入れなくちゃいけないとか、ここで恋愛をやらなくてはいけないという思いがあまりにも強い、もうあと 1、2 枚しかないというところで、それを全部そこにおち込んで何とか、エンディングに持っていくという作品があまりにも多いので、この第 1 回目を、17 編、初めて読むということもあつたのでしょうけれども、その印象と、だんだんそれが薄れていったということがあります。

ただ、20 回までに至る間に、こういう出来不出来というんですかね、よくこういう新人賞の作品の選考をやっていると、選考仲間で言うんですよね。プロ野球のドラフトでもよく言われるでしょう。作不作というのがあつて。高校野球で名だたる松坂世代とか。そうすると松坂世代がいっぱいいるわけですね、そういうトップクラスが。そうすると、その次の年はちょっと不作というのはちょっと失礼ですけどもというのがあるよね。賞もそういうのあるかもしれないという話をしておりました。

清：今、すごく嬉しいです。私、第 6 回、先生の 1 回目の審査員特別賞をいただきましたので、ありがとうございます。

清原：もう一度読み返してきたんだけど、深大寺を背景に持つてくることに関して、実になめらかな必然性を示している点というのは感心したという選評で書いてましたけれども、第 1 回目だったものですからね。危惧ですね。いわゆるいっぱい制約があるのをどうやって乗り越えていくかなということで、そこは実に滑らかに、それまでの物語の展開と関係なくて乗り越えていく作品だつていうので感心しました。

清：ありがとうございます。村松先生うかがえますでしょうか。思い出を。

村松：ええと、進行表みたいなものを、この前にお送りいただいたものですから、それを見ていたら、今まで記憶に残る作品をと言われて、にわかに思い出せなかったものですから、送ってもらつたんですね。バックナンバーを。それで読んだら「全力少女」という最初の方の作品であるんですけども、もう圧倒されて、パワーがあつて、面白く読んだし、それから「蕎麦談義恋道中」という、非常に若いくせに、大人びた、なんか井上さんの選評に講談

のようなと書いてありましたけれども、本当に落語というより講談の、張り扇かなんかの調子に乗っているような感じの、しかも若いに似合わない古めかしい表現で、しかもそれがテンポよくつづられている。これもすごいレベルだなと思います。そういうふうに考えていくと、その後の方の作品が、それより小説としてうまくできていないかということでもないんですけれども、やはり最初の頃の作品はやはりパワーがあったと思いますね、インパクトが。圧倒的なエネルギーみたいなものがこっちへ伝わってくる要素があったんですけれども、やはり賞は続いてくると、過去の受賞を一つの参考にするというか、下敷きにするというケースが出てきますけれども、ちょっとそういう傾向のもとにウェルメイドのような作品、小説としてわりと上手になったように思っているんですけれども、圧倒的な何かを伝えてくるものがないというような、そういう傾向もあったような気がします。

私はそういう 20 年の記憶の中で一番自分の選考委員としてやっていて、気持ち、心情の中に影響を及ぼしたのは、井上荒野さんの直木賞受賞なんですよ。やたら今日いじって申し訳ない。

井上：笑

村松：直木賞を受賞した人を選考委員に迎えるということはよくあることだと思うんですけれども、選考委員として同僚みたいに選考していただく方が、やっぱりそこで直木賞をもらったという、そういう作者の華やぎと躍動みたいなものに賞が重なってくる。そうすると、やはり私もその気持ちの厚みがそこで出てくるし、躍動感が伝わってくるような気がするし、作品にもやっぱりそういうことが、応募作品にも影響してくるんですね。

だから、そういうことの力がすごく井上さんの受賞によって雰囲気が変わったと思います。それからもう一つ言うと、後でいろいろお話されるんでしょうけれども、この賞がですね、さっき市長さんが言われたような、市でやるか、みたいな賞でなくて、いわば有志みたいな人たちによる手づくりの賞であって、大きいスポンサーとか行政のバックアップとか、そういうこととは別のものとしてあるというのも、やはり何かこの賞を何とか練り上げていかなきゃならないなという、選考する立場としての何かエネルギーを与えるものがありましたね。だから、そういう意味では、毎回笑い話をしたり、からかったりしてきましたけれども、20 年こうやって、こんな、例えば行政でやったとしたら、その賞が行政の支出として見合うものかどうかとか、そういうものもテーマになるんですけれども、それもその件についても大変だったと思うんですけれども、よくぞここまで続けてきたなというふうに、やはり実行委員会の方に敬意を表したいと思いますよね（会場から拍手）。

清：ありがとうございます。まさに次の話題がそれなんですけれども、深大寺恋物語は、今おっしゃったように、地元有志によって運営してまいりました。創設当初は、応募作を事務局の皆さんが本業の傍らに集まって、一日中コピーに明け暮れたそうです。このように、地

域活性化を目的として地元の人々が作り上げてきた深大寺物語に対して、どのような期待を
していच्छやいましたか？ 井上先生、伺えますでしょうか。

井上：最初の期待ということですかね、引き受けたときの。

あのですね、実は最初の第1回目に候補作を読んだ時に、私はちょっと、やはり最初はちょっとレベルが低かった。小説とはちょっと違う感じだったんですよ。10枚という枚数もあるし、深大寺というくくりもあるし。読み物だったんですよ、小説というよりも。なんか、だから、これはそういうふうに考えればいいんだなって思って。よくね、最初の頃、毎年、わりと毎年送ってきて、候補に上がってくる、すごくご年配のおばあさんがいらच्छやったんですよ。時代劇みたいな、すごい端正な感じで書いてくる。それに小説っていうのはやっぱり読み物だったんだけど、こんなお歳で、こんなきच्छりとお話を書いてきていて、毎年それを、この賞を励みに書きしていच्छやるといのはいいこと、いいなって、そういう、私もそういうふうに年をとって、そういうふうなことがあって、すごくいいことなんじゃないかなって思って、ただ、だんだん、だんだん欲が出てきて、なんかね、これは私の、ちょっと自分で言いますけれども、私の選評のせいもあると思うんですけども、私、結構最初は割と甘い感じで書いていたんだけど、だんだんやっぱりちょっとレベルが上がってくると欲が出てきて、結構厳しいこと書きच्छやったんですよ。

そしたら、やはりレベルどんどん上がってきて、あ、これはもうちゃんと小説だなという。小説だなと思うと、ますます厳しくなって、やっぱりちゃんとした小説ってこうだよとか、どうせ書くからにはこんなふうに書こうよというのをすごく言いたくなつて、どんどんどんどん厳しくなつていき、私もなんだか本当にムキとなって書いたやつが、応募要項のところ
にこれをご一読くださいみたいに書いてあつたり。

清：みんな熟読しています。

井上：ただね、別にプロの小説家にならなかつたていいんですよ。もちろん、ここからプロを輩出できたらいいなとか、ずっと書き続けて、この賞が終わच्छやった後もずっと書き続けて、どこかに応募とかして、プロになる人出てほしいな
って思っていますけれども、そうじゃなくても、小説って書く、小説に書くだけで、今までわからなかつたことがわかるようになるって、それは私の持論なんですけれども、自分の中で自分が隠していたことが書くということであらわになつていくというのが小説を書くということだと思っているので。だから、みんな書きたいと思う人はどんどん書いてほしいし、受賞者の、歴代の受賞者の方、賞にもれた方も、ずっと書いてきていただければな
と思っています。ありがとうございます。

清：清原先生、地元有志の方々が手作りでこの賞をやっているというこの関わりの中で、実行委員の方との関わりの中で感じたこととい
うのがありますでしょうか。

清原：今、村松さんもおっしゃったように、そういう賞がほとんど僕は見かけたことがないわけ。どこかの新聞社だとか、僕がやっている山梨日日なんていうのは新聞社なんです、朝日カルチャーは朝日カルチャーです、そういう大きなバックがあつて、そういうところで応募してくるという賞が圧倒的に多いわけですが、こういう中で、皆さんほとんど青年の人たちが、すごい熱意を持ってやっていらっしゃるということには非常に打たれましたね。だけれども、たった 10 枚で書くということで、なかなかここからプロが出るかという、10 枚くらいの作品じゃやはり無理だろうという気持ちはずっと持っていたんですね。それを続けることによって、例えば 10 枚を連作短編みたいにして、10 編書けば、100 枚になるでしょ。そういう力をこの応募によって得ることができるといいな。そのときに、何かの賞に引っかかる最優秀賞審査委員賞とか、いろいろ 6 つ賞があるわけですが、その中で選考委員の目が届いた作品というふうに受け止めていただいて、次の作品でまた切磋琢磨していただく、そういう連続を期待していきたいなというふうにはずっと思っていました。

清：ありがとうございます。過去の受賞者もみんな嬉しくなったと思います。

井上先生は実行委員の皆さんとお酒をよく飲むのが楽しかったというお話を伺がってるんですが。

井上：そうですね。いつも選考会の後に、選考委員 3 人と、それから実行委員のみなでご飯の場を設けてくださって、私、ご飯食べるの大好きなので、結構、おいしくないと嫌だよとか、すごいわがまま言つて。お店もすごく毎回選んでくださって。こんなに、実行委員の方とこんなに仲良くなったっていうのは、本当にこの賞が唯一というか、一番で、最初は本当にまだ全然わかんない人たち。私、本当に社会の仕組みというのがよくわかってなくて、実行委員って何だろうとか、この人たち誰なんだろうって感じだったんですけど、だんだん、だんだんわかってきて、みんな手弁当で頑張ってくれているんだなというね、それを、しかも 20 年も続いて、すばらしいことだと思いますよね。もうみんなみんな一人一人と仲良くなって離れがたいです。本当に。

清原：すみません、もう一言。僕は第 6 回ですから、何遍も言いますけれども、5 回過ぎて大体の路線がもう既に固まっていたときなんです。第 6 回からずっと感じていたことは、ここでもばらしていいのかな、実行委員の方々、青年たちが自分たちでも選考されていたんですね。それで我々の選考と、市長さんが選んでくれる作品と入れて、6 編を最終的に選ぶわけですが、その結果と自分たちが選んだやつとの、この合っていたり合わなかったりする。その、ここは何位だった、一緒だったって、すごく喜んでらっしゃる姿というのが実に可愛らしくて、いや、それが一位が変わっていたりするんですけども、あれは自分たちが低かったものが一位になっていることもあったり、だいたい評価が一緒だったり、一喜一憂で

はないですけども、当たった当たったなんて本当に楽しんでいらっしゃるのかな。それが微笑ましくて、面白かったですね。

清：ありがとうございます。

では後半になりましたので、ここからはいよいよ文芸論、小説論について伺っていきたいと思います。深大寺物語の公募は終了になりますが、世の中にはたくさんの小説コンクールがあります。この会場の中の方にも小説家志望の方がいらっしゃるんじゃないかなと思います。これから小説を書きたいと思う人、書いている人たちへアドバイスをいただきたいと思っています。

村松先生、お願いできますでしょうか。

村松：これが一番苦手な役なんですけれども。でも結局いろいろな作品を読んでいくと、評価が各人に分かれるのは当然のことだし、それぞれの価値観の中でその作品の評価は決まってくると思う。それでも最終的に最優秀賞というふうになったものを改めて見ると、やはり最終優秀賞になるべくしてなったという位置づけができたりもするんですよね。

ですから、何となく深大寺というと、いろいろな贅沢な、書けるテーマが多そうなんですけれども、最終的にはやっぱり小説を書くということは自分を伝えることなので、文章も肉体的イコール文体、文体イコール肉体だというふうに言われた作家もいましたけれども、そういう個人の一番ふさわしい文章のスタイルで、そういう自分の一番言いたいことを伝える、その力がどれくらい練り上げられていくか、積み重ねられていくかということにかかっているんじゃないかと思うんですね。上手にというのもあるんですけども。そこには何か限界があるような気がして、自分を伝えることを自分しかできない形で書かれてしまうと、それは反対できない。そのパワーに押し切られて、自分の嫌いな作風であっても最優秀賞に推すみたいなの、そういうこともあり得ると思うんですから、いかに自分を伝えるということを一番考えるべきではないかと思いますね。それで、この賞が別にどんどんどんどん先細って行って、今回で終わったというのじゃなくて、何らかの形の余韻を残して、余裕と余韻を残していったん歩みを止めるみたいな印象があるんですね、私は。だから、さっき井上さんが言われたように、最初の方もすごくパワーがあったんですけども、だんだんやっぱり違う形のインパクトによって、後半もまた違う力の作品に力が出てきたという傾向もあると思うんですね。

ですから、続けていくことの意味を失って止めるんじゃなくて、その方向性は見えているんですけども、見えている段階で一旦歩みを止めるみたいな止め方だったと思うので、その何となくそういうふうに納得しているところで、心の寂しさを感じるんですけども、心が落ち着くといえますか、そんな感じなんです。

清：ありがとうございます。井上先生、先ほど読み物と小説は違うというお話をしてくださ

って、応募規定の厳しい選評にもそれが書いてあるんですが、改めてその違いについて教えていただけますでしょうか。

井上：あの、これはもう小説感って、プロでもいろいろで、これは私の考え方だと思って聞いていただきたいんですけども、やはり小説ってわからないことを書く、書くのは小説だと思うんですよ。つまり、自分の中にある謎があって、例えばこういう状況のときに、こういう立場の人だったらどうするだろうという。それ、例えば私は自分の小説をちょっと例に出すと、「生皮」というセクシャルハラスメントの小説を書いたんですが、何年前ですね、それに、それはセクハラを悪いセクハラする奴はひどい目にあえというふうなことで書いた小説じゃないんですよ。

その前に、すごく有名なフォトジャーナリストの人がすごくひどいセクハラをしていたという事件、告発があって、そのフォトジャーナリストは仕事としてはものすごい人権派なんですよね。すごくいろいろなところに行って、そこで虐げられている人をルポしてきた人。それなのに、その一方で自分の弟子みたいな女の人にそのパワーの差を利用してひどいことをしていた。それなんで、なんでなんだろうって思ったんですよ。一人の人間の中にそういう2面性がある。もしかしたら3面性も4面性もあって、それはなぜなんだろう、本人の中ではどういうふうに整合性をつけているんだろうか。

まず私の中にその疑問があって、いつもどんな小説でもそうなんですけれども、だから書くことで、書きながらその疑問の答えに、答えは出ないかもしれないけれど、少しずつ近づいていくというか、自分なりの答えを見つけていく作業。私、それが小説だと思うんですよ。そして読み物というのは、エンタメの今ものすごく売れているエンタメ小説とかは、ありますけれども、結局わかっていること、セクハラ悪いとか、100日後に死ぬ花嫁と暮らすと悲しいとか、そういうあるじゃないですか。そういうもうわかっていることを、犬が死んだら悲しいとか、そういうわかっていることをすごく上手に書くっていうのも一つの、一つの形。それはまあ、エンタメにはプロが書くものでもそれは多いんですけども。だから、それももう本当にレベルの問題で、私はプロでそういうの、プロの書いたそういう小説も、けっ、て思うことがありますけれども、でもそれはそれで成立しているんです。だけど、私が思う小説っていうのは、やっぱり著者がまず何でだろう、なんでだろうという謎に向かって書いていく。それを書いたことで、さっきも言いましたけれども、自分の中でずっと隠していたことが図らずもあらわになってしまう。そういうのが小説だと私は思っています。

清：ありがとうございます。この深大寺恋物語は10枚という超短編だと思うんですけども、その中でわからないものを突き詰めていくということもできると、井上先生はお考えでしょうか。

井上：うん。できますよ。みんな10枚でいろいろ書こうとしすぎなんです。本当に10分

のことを書いたっていいわけなので、10枚で10分のことを書いてちょうどいいぐらいだと思います。それでも、例えばこういう状況のひと、こういう状況の人が深大寺の蕎麦屋でしゃべっていたらどうなるんだろう、この蕎麦おいしく感じるのかなとか、あるいはどこかの蕎麦屋にふらって、全然人が並んでいない蕎麦屋にふらっと入ったら、すごく感じの悪い店主がいたとか、なんでこの人こんなに感じ悪いんだろうとか、その店主の人生を想像するだけだって面白いと。どんなどんな人生があるんだろうとか、それだけだって面白いし10枚でそれをかけると思います。

清：ありがとうございます。清原先生は、批評家、文芸批評家としての観点から、いい小説、受賞に値する小説というのはどういうものだと考えていますか。

清原：よくいうのが、人間が描けているかどうかですよね。ここからちょっと冗談を言いますけれども、人間って男と女しかいませんよと言ったら、いや、この真ん中の人がありますので、それはそれで描き方があるでしょうと思っているんですけれども、最終的にいい小説というのは読んでみて、ああ、よかったな、ほっとするなというのと、逆にいやな思い入れ、読後感の悪い小説でも、やはりいい小説はいい小説なんです。山本周五郎が小説には純文学もエンタメもないと、いいか悪いかだって言ったのは、いい小説というのは読者によって違うと思うんです。だけれども、小説を描くということでは、最終的に人間を描く、それをどういうふうに描いていくか。

自分とは違う人間というものを主人公にした場合と、自分そのものを主人公にした場合と、また描き方がいろいろある。その中で、自分の小説の中で主人公を、どういう人生をたどらせていくかというのは、作品ごとに違ってくると思うんです。その都度その都度、主人公の生きざまというものを著者が考えて、最後までご都合主義、それから唐突な展開というのをしないようにして、それが10枚であれ30枚であれ100枚であれ、枚数関係なく同じことなんです。そこを重点的に、いかに主人公を物語の中で生かしていくかということを考えていただきたいと思います。

清：ありがとうございます。村松先生、いい小説とは何でしょうか？

村松：いい小説とは？というのは、答えが出てくるのは難しいんですけれども、悪い小説、例えば10枚で深大寺というテーマをはらんでいてってなったときに、悪い小説になってしまいがちなのは、やはりストーリーを10枚でストーリーを作ろうとするようなタイプだと思うんですよね。

10枚でストーリーを作ろうとすると、コントみたいになったり、ショートショート、いわゆるショートショート的なストーリーになってしまつて。そして自分を、自分自身であれ自分の抱える謎であれ秘密であれ、それが最終的に、気がついたらぼろっと自分がそういうこ

とを露呈してしまったみたいな結果になるような作品というのは、ストーリーを一生懸命凝ったところからあんまり出てこないんですね。ストーリーを書こうとすると、やっぱり構想を考えて、初めからこういう書き出しで、こういう終わり方でいって、こういうハイライト場面を作るというようになるんですけれども、それに沿って、そこに深大寺というものを入れて、なおかつ小説としての味を出そうとすると、もう非常に自分でやってみろと言われたときに困るというのが一番僕の一番正直な感覚なんだけれども、でも、難しいことをやるためにやっちゃいけないのは、やはり何かストーリー主義になることだと思いますね。

清：ありがとうございます。なのでストーリー主義にならないように、出来上がったものを客観的に見るためには、どのような心持ちでいけば

村松：僕はもと文芸編集者をやったものだから、この推敲したり、それから自分の書いた作品を鑑定したりする癖があるんですよ。

絵でもそうでしょうけれども、だんだんだんだん書けているというか、直せば直すほどつまらないものになってくる。だから、最初に書きなぐったときの、絵のような勢いが消えて、結果的に何かどこかで見たような作品になってしまうなという、僕自身はそういう経験がすごく多いんですね。そういう文学を過去に分析しているような、自分の書いたものの中にあるような気がしているものですから。だからどうしたらいいかというのが難しいですね。小説になっている、いい小説を書く以前に、10 枚で小説として成立しているかどうかというところをまずクリアしなきゃいけない。非常に難しいテーマだと思うんですね。

清：ありがとうございます。井上先生はどんなふうに、推敲のとき、どんなポイントを見ていらっしゃいますか。

井上：自分の小説の推敲の時ですね。私は削りますね、結構。例えば5行書いているところを、これ1行でいけるというふうにして削っていく。やっぱり説明し過ぎちゃうんですよね。やはりアマチュアの方のものを読んでみると心配なんですよ、自分が言いたいことが伝わっているかどうか心配になっちゃって、それをテーマを台詞として登場人物に言わせたり、あるいは地の文で言っちゃったりとか、そうするともうそれはそこでもなんかも終わっちゃう。広がっていかないんですよ。だから場面で本当に5行ぐらい主人公にしゃべらせているところをパッと切って、ただのその人の1個の1行の行動にするとか、私は割と削っていく方向で直します。

清：すごく勉強になります。清原先生は小説を書こうとすることに、どういった、文芸作品とかを吸収するにはどんなものを読むのがお勧めでしょうか？

清原：いや、それはもう小説書こうと思ったら他の人の作品なんか読まなくていいですよ。自分なりに書いていけばいいんじゃないですか。だって、前の人の作品を読めば、それに影響されちゃうわけでしょう。どこかでそれは出てくるんですよね、影響として。

それに感動すればかすることを頭の中に刷り込んで、そういう描写がいいんだって思っちゃうとやばいですよね。だから小説書こうと思ったら、自分がこういう小説を書こうと思ったら、その種の他の作品をなるべく読まないようにして書き上げてから読むとか、そういうふうに、これはちょっと極端な話かもしれませんが。最終的にはその人が書いた小説作品というのが一番大切なことですから、自分が書いたものというものにもっと執着するとか、それはうっとり酔っては困りますけれども、とにかくそこに全部自分を投入できるかどうか。そのときに他の人の影響を受けないような表現ができるかどうかということに関して言えば、それは自分で描いていくしか道はないというふうには、ちょっと極端かもしれませんが、そういうふうに思います。

井上：いや、私は全然真逆で、こればかりは本当に今、本を全く読まないで小説家になろうとしている人が結構いるんですよね。全然読んでませんみたいな人。でもね、やっぱり小説って読まないと書けるようにならないです。書かないと書けるようにならないんだけど、読まないと書けるようにならないです。だって、世の中にはもう本当に素晴らしい小説がすごくあるから、それをよく知っておかないと。だから、読むときも簡単に読める。すらすら読めるものばかりじゃなくて、これ結構、結構厳しいなみたいなものでも、読んでいくと、ある瞬間にバツてそれが入ってくる瞬間とかがあるんですよね。そういう経験をしてほしい。そしてもう、一回やっぱり打ちのめされるんですよ。それはもう当然こんなすごい小説があるんだって。だけど、その打ちのめされる経験がないと。小説は書けないと思うんですよね、私は。

清：影響はどういうふうに、こう、しないようにしていくんでしょう。

井上：影響されても最初はいいと思う。別にそれは、模倣でなければ。うん。だって絶対に影響を受けてますもん。どこかで。それを自分の中でどういうふうに自分の、自分のものとして別のものに変えていくかという、それは模倣とかパクリみたいなこととは全然違って。つまりご飯食べるみたいな感じですよ。ご飯を食べる、食べて、それが自分の別の髪の毛とかそういうのになっていくみたいな感じだと思ってくれればいいと思います。

清：村松先生、いかがですか。

村松：僕は、たまにね、深沢七郎みたいな人がいるんですよね。要するに読書に読書を重ねたあげくの到達点として書くという行為があるみたいな、そういうことが少し見えてくるよ

うな人と、全くそういう参考にするものがないまま書いているんじゃないかと思わせる。だから、本当にそうかどうかはまた謎なんですけれども、そう思わせる作品があつて、そう思わせる作品を、もしかしたら深沢七郎さんだつて、読むべきものを、自分が吸収すべきものはものすごいレベルで読み込んでいるかもしれないですね。だから、その読み込んだ感じが消えたような、あたかも自分がゼロの状態で書いているような感じになる小説が理想みたいに僕は思うんですけれども、自分じゃ絶対書けない。妙に飽をかけちゃう。そういう何か。いい仕事をしていますねみたいな感じの自分の作品に対してもそういうふうに鑑定してみてしまうような癖があつて、なかなか自分が満足するものを書けないもんだから、何かこういうことであるというのは、このテーマに関しては何となく言い切れない。

清：ありがとうございます。井上先生が、タイトルを簡単に付けるな、安易につけるなということをつかの回で言ってらっしゃいまして、そちらもきっとみんなが引っかかりやすいポイントなので、改めて伺います。

井上：タイトルは本当に大事ですよ。だって小説って、言葉で、言葉を使って言葉にどれだけ神経が使えるかというのは、小説をうまく、小説を書く上ですごく大事なことから。そこで本当に適当なタイトルをつけてきて、なんか、なんだろうな、ちょっと例を出すのが難しいんですけれども、何か、「深大寺の恋」とか、そういうの全然考えてないでしょうというようなタイトルが結構多くて、そしてそういう人に限ってペンネームだけむちゃくちゃ凝っていたりとかして。ペンネームに凝る前にタイトル考えようよって。一言でもいいんですよ。だけれども、これしかないというタイトル。昨日は新連載のタイトル会議、オンラインでしたけれども、やって。本当に、いいのができたから。いいのできるまで考えないとダメですよ、私はね。

清：ありがとうございます。清原先生。いろいろな選考を今まで勤めていらっしゃって、その中でこれやると NG なんだよねみたいなのでありますか？ 初心者がやりがちなこと。

井上：これは井上さんもおっしゃっていたけど、ずっと物語が来て、ぽーんとラストに、もうそろそろラストで、こういう予定調和というんですが、こういうところで終わるだろうなという作品があまりに多いです。

それともう一つは、結末をこの作者は考えられなかったんじゃないか。そうするとどうするかというと、幻想を持ってくるんですよ。そこで、幻想だったとか幻想でどうのこうのとかファンタジーにしまうっていう。非常に安易な逃げ方をする。

村松：それ僕は何回もやりました（会場笑）

清原：応募作の中で、やはり一番最初に我々がABCをつけてCをつけるのは、そういう作品が余りにも多い。冒頭で、プロ野球のあれと一緒にですが、豊作の次の年は不作だというのがあって、20編くらい、最終的にわれわれのところに来るんだけど、そのうちの十何編は3人ともCをつけるという、共通の、半分以上がCという場合があるんですね。

そういうのは大体が、最終まで来て、さあ、どういうオチをつけて、これでエンディングにするんだらうと思ったら安易に逃げちゃうという、夢だったとか幻想だったとか、はっと現実に戻って、恋を諦めたところに、恋が成就したとかっていう、そういうあの、考えて考えられなかったんじゃないかな、という作品が多いことは確かですね。

清：村松先生。小説の終わり方って、いかがでしょう。

村松：絵描きさんが、いつ、描いている絵のキャンパスの前を離れて、もうこれは渡していい作品だと思うのっていうのは謎だと思うんですよね。多分それは展覧会の期日が来たからという、誰か画廊の人には渡さなきゃという時が来たときに、手放す時だと思うんですよね。小説はそういうことがなければずっとそのあり方を考えてられるわけですよね。そのあげくどうするかというのは、再三ここで何か曖昧な立場を表明していますけれども、わからないよ（会場笑）。

清：先生でも。

村松：先生でもということでもないんだけど。それが一番なんかね、なんなんですかね、編集者をやっていたことの後遺症かもしれないんですけども、何か自分で、聞いたふうな終わり方にする。さっきの清原さんの言われた夢オチみたいなことも、これは夢オチになっちゃっているなと思いながらも、その作品を終わらせてしまったり、そういうような反省はいっぱいありますからね。

だから、これをこういうふうにしたんだっていう手応えのものというのは、僕の場合は皆無と言っていいんですよ。

清：井上先生、いかがですか。

井上：私はですね、私は結末ということはあんまり考えないで、長編のときはちょっと考えますけれども、短編だと余り考えなくて、大体私の書く短編って嫌な感じの短編が多いんだけど、嫌な感じにしてって嫌な感じにしてって、嫌な感じ最高潮みたいになったら終わるという感じ（会場笑）。もうそしたらもうそれでいいんです、私は。だから、その嫌な感じな後の始末のつけ方とか、例えば嫌なことが起きて、その始末の付け方がまたすごく嫌だったらそこまで書きますけど、もう嫌になって嫌な感じになって、嫌な感じになって、もう

これ以上不快、これ以上は嫌にならない、嫌な感じにならないなって思ったらやめるみたいなところがありますので。

清：面白いですね。

では、小説の楽しみ方について伺いたいんですが、最近は活字離れが進んでいると言われてはいるんですけども、先生方にとって小説だけが持つ魅力というのはどういったところにあるのでしょうか。村松先生、伺えますか。

村松：僕に聞かないでください（会場笑）。

清：待ってください！

村松：いや、それは読んだ後に、感心する癖がついているから。それを自分の読者として、純粋な読者として感じる感性が摩滅しているのかもしれないですね。長いこと編集やって書くこともやってきているから、なんていうか後遺症みたいなことですね。だからちょっとその読み方について鮮やかな答えというのがどうしても浮かばない。ここで僕が言っちゃうとすごい自分に嘘をつくことになるので。

ありがとうございます。清原先生。小説だけが持つ魅力というのは何でしょうか。やはりあれでしょうね。自分とは違う世界というか、主人公も含めてそういった世界を味わうことができる。それから、自分にはできないようなことが物語世界の中で展開されていくということに対する驚きといいますか、そういったものと、それからあと小説に対する共鳴ですかね。小学校 5 年だったかに十五少年漂流記を読みました。最後まで読んで一番感心したのは、みんなで選挙をして、大統領という言葉は出てこなかったと思うんですが、首相というリーダーというか、それをみんなで選挙をして選ぶという場面がありました。

その時に、学校で習った、その頃本当に民主主義って習ったのかどうか記憶がないんですが、後付けの知恵だったかもしれませんが、これが民主主義というものだなということを感じて、少年の世界でもそういうことがあるんだってすごく感心したというのがいまだにくっきりと覚えているんですが、そういう物語の世界に入っていって、自分だったらどうするか、こうなるだろうということをいろいろ空想する。ですから、物語が終わってからも、その先のことを考える。先ほど井上さんが嫌なところで終わるという、そういう小説の場合は、作者は書かないわけですから、読者が勝手に考えればいいわけでしょう。それが小説の楽しみ方だというふうに思います。

清：素敵ですね。井上先生、いかがでしょうか。

井上：私は小説言葉派なので、小説ってやっぱり言葉で書かれているということが独特だと思うんですね。例えば、すごい場面とか、すごい情景とか、感動のストーリーだけだったら映画でもいいわけですよ。だけど、それで小説にどういう意味があるのかというと、そういうある情景をどんな言葉で書かれているか。それは、例えばこの場面を、今この場面を 10 人の小説家が書いたら使う言葉って全然みんなそれぞれ違うと思うんですよ。同じことを書いても、それから使う言葉も違いますし、どのどこの漢字を開いて、開くという、つまり平仮名にするということなんですけれども、どこを平仮名にしてどこを漢字にするか、そういう字面もやっぱり小説の魅力として私にはあるんですよ。

「昨日彼がここに来た」というのも、「昨日」と「彼」と「来た」を漢字にするのと、「きのうかれがここに来た」と平仮名で、全部平仮名で書くのでは全然受け取るイメージが違う。それによって小説の雰囲気というか、気分ができてくる。私は、やっぱり言葉、別にそれはだから、紙の本じゃなくても、電子でも電子の画面で読んでも、それは伝わる。

昨日、この数日前に私、眠る前にオーディブルという耳から聞く聴く小説みたいなのを、あれ聴きながら眠ってみようと思ってやったら、やっぱり全然駄目で。「杜子春」を選んだんですけれども、半分途中で寝るってということもあるんですけれども、杜子春がいたということしか覚えてないんです。全然これは耳で聞いても駄目なんだということはその時に分かりました。はい。

清：村松先生、小説の魅力とは何でしょうか。

村松：そんなことに答えられるわけじゃないじゃない（会場笑）。小説の魅力とは何か。まったく、謎と謎を謎のまま受け取って、その謎がものすごい魅力として、自分の、読んだ自分の中に膨らんでいくような作品といいますか。だけど、そんな小説書いたことのない。

清：村松先生が一番忘れられない小説は何でしょうか。

村松：いやあ、いっぱいあるんでしょうけど。無いとも言えるんでね。要するに僕はもしかしたら、ここで喋っていて思うのは、小説を読んで、それを人生の何かの分岐点とか岐路にするようなタイプじゃないような気がします。何かもっと違う、例えば芝居の 1 シーンが全く芝居とは別な要素かもしれないけど自分のなかに突き刺さってしまって、そのことの影響を受けて、その後の自分の時間が色が変わっちゃったり、そういうことがあるし、それから、ある人がある時つぶやいたセリフ、なんでもなし、現実にいる人間のセリフですけど、そういうところのインパクトを受けるんだけど、そういうこと以上に小説が自分にかぶさってくるという体験はものすごく乏しいかあるいは無いと答えた方が正しいのかもしれないくらいですね。

清：ありがとうございます。清原先生、小説をより深く味わうために、どんな読み方をされていますか。

清原：それは、作品を読み始めないと、深いところまで行くかどうか分からないわけですね。どんどん読み進めていくうちに、どんどん深みにはまっていくというのが、やはり面白いところじゃないですか。そうすると、よく言われている。ページめくるのがもどかしいとかとかというような表現がありますけど、その小説でページをめくる時のその瞬間の左ページのラストの行で読んだつぎに、めくった 1 行がどういう展開になっているかというのが常にこう、驚かされてほしいなという気持ちで読んでいます。

それがこうなるのか、こうなるのかというふうに、どんどんどんどん自分とは違う方向に行く場合と、自分が考えたとおりに行く場合と、いろいろありますけれども、その都度その都度、ページをめくるごとに何か新しい、それまで読んだページ以上の新しさ、驚き、新鮮さというのが出てくる作品というのは、やはり読んでいて深みにはまっていくという感じはしますね。

清：ありがとうございます。井上先生はどんな読み方、楽しみ方をしていますか。

井上：というか、やはり自分はプロの小説家として書き始めてから、純粋な楽しみ方がなかなかできなくなって、やっぱりうまいとか、これなら私の方がうまいとか、あと、そうですね。私だったらここから先、この人この脇役のことを書くだろうとか、そういうふうに思ったりするし。あともう本当に圧倒的に面白い小説は、どういうっていうか、もう、そのことだけ考えて読んで、本当に本当に夢中になって読んでいます。まあ、ご飯も食べなきゃいけないし、寝たりお仕事もしなきゃいけなかったりするんですけども、そうすると、そういう面白い本を読んでいるときって、何か誰かと約束を、何か待たせているみたいな感じがするんです。何か私約束があったとか、待っている人がいるというふうな感じで面白い本って、そういうふうになりますね。

清：最近のそこまで思った本は。ちなみに。

井上：最近の、最近そこまで思った本は、さっきも控室に来たんですけども。村山由佳さんの「ブライズ」という新刊がめちゃくちゃ面白くて、エンタメですけども。彼女はもう本当にエンタメの女王と言えるような人で、これはね、直木賞が欲しくて欲しくてたまらない、ある女性作家を主人公にした話なんです。その業界暴露的なこともあるし、これ誰をモデルにしているんだみたいな、そういう興味もあるし。

そして最初はその、天羽カインというんですけど、その主人公の名前が。まあすごく嫌な女なんです。もう編集者集めてちょっと反省会するからとか、あと初版 5 万とか怒った

りする、初版5万ってほんとすごい数なんです。初版5万しか出さないから、すぐ足りなくなるんじゃないのとか怒ったりするんですよ。

嫌な女だなと思いながら読んでいくと、結局彼女はすごく売れているんだけど、芥川賞じゃなくて直木賞だけが取れないんですよ。ずっといつも落ちるんです。それで村山さんはこの女に取らせるのかな取らせないのかなと思いながらずっと読んでいくと、ちょっと最後びっくりな結末になって。いや、うまい。でね、あの天羽カインが好きになるんですよ。天羽カイン、すごいよ、あんたすごいよというふうになる。この作り方を本当にエンタメとして最高で、エンタメでもあるし、ある人間の人間の業みみたいな感じでも読めるし、本当におすすめというか、これから帰って1冊買うならこれを買うといいと思います（会場笑）。

清：ありがとうございます。ちょっと話が戻っちゃうんですけど、創作論に戻らせていただくんですけども、短編と長編を書くときの違いって、書く側としての違いってどんなところにあるのでしょうか。村松先生に伺ってよろしいですか。

村松：僕は長編を書くときは、例えば石を投げるときに川があって、その向こうへ届けさせなきゃいけないというくらいの肩の力で、石を投げるような気分で、取り掛かるんですよ。だから、それには構成も必要だろうし、推察もある程度必要だろうし、ハイライト場面の想定も考えなきゃいけない。終わり方もどうにかしなきゃならない。短編の時はそういうことをしないで、とりあえずこの自分にインパクトのあった現実の時間みたいなものをなぞりなおすみたいな形で書き始めて、そこからどう横ばいして、角を曲がるとどんな景色が見えるかなと思って角を曲がって、また角があるとまた角を曲がると、今まで想像できなかった何かが見えるから、そのうらないみたいにして辿って行って終わるところで終わるみたいな。短編の場合は、そんな大雑把な違いがあるんですけども。だから、長編書くときもそういう癖ができちゃうもんだから、あらかじめ構成を決めて書くんですけども、角を曲がると別のものが見えてくるとそっちに流れちゃうんですね。だから、作戦通りの自分が思ったような作品を書けたというふうにして着地して楽しいじゃないんですよ。

清：それが面白いところ。

村松：うん。まあ営みとしては面白いけれど、あんまりこういう文学論の中で参考にならないですよ。

清：井上先生、どうでしょうかね。

村松：私はちょっとわかりにくい例えかもしれないんですけど、私、大体、短編も長編も場面で作っていくんですね。それで、例えば1枚の画用紙を想像してもらおうと、長編というの

は 1 枚の画用紙を端っこから中心に向かっていろいろな色を置いて埋めていくイメージなんです。中心はあるんですね。で、短編はまず中心があって、そこからいろんな色を外側に広げていくというようなイメージなんです。だから、長編の方がそういう意味では計画、多少計画的、短編よりは。色を置いて、真ん中が朧に見えているから、そこまでどういう道筋で行けばそこに行けるのかな、あるいは今行った時にちょっと違っていたりもする。でも短編はもう本当に一つの言葉から考えたりとかもするんですね。

このあいだ、すばるに書いたのは「きれいじゃないけど飽きたんだ」という短編書いたんですけども、それはもう嫌いじゃないけれど飽きたんだという台詞を、あるドラマの中でそれが出てきて、男が女に言うんだけど、なんていうひどいことを言うんだという、その台詞がすごく面白かったから。それが中心にあって、そこから考えて、まあ、子供の話なんですけれども、そういう書き方をしますね。

清：清原先生は小説を教えることもあると思うんですけども、長編短編はどんなふうに教える違いはありますか。

清原：短編の場合はやはり盛り上がりがあって、それをすっと落とすところをどうするかということを考えますよね。長編の場合は、初心者に限ってだらだらだらだらと書いてみて、緩やかに盛り上げていってという、その盛り上げ方の、何て言うのかな、距離というか、その違いがあるわけですから、今回のような 10 枚、たった 10 枚の中でどれだけ早くその盛り上げを持ってくるかどうかということは意識した方がいいですよ。その盛り上げ方は短編と長編では違いますよ。長編の場合、ちょっと余裕があるんだけど、どこかでやはり盛り上げるところが絶対に必要ですから。それを早目に来るか、もう少し後に来るかというくらいの差ですから、短編の場合はその盛り上げ方を、どこに設定するかということを考えながら書いた方がいいでしょうということ言っています。

清：ありがとうございます。

司会：以上をもちまして、文芸鼎談は終了となります。

これより当実行委員会実行委員長吉井秀治より、最後のご挨拶をさせていただきます。

実行委員長：

実行委員長として、最後のご挨拶をさせていただきます。

本日は厳しい寒さの中。これほど多くの皆様に鼎談にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。鼎談中にも何度かお話が出ましたが、本日参加できなかった方、過去に応募された方とか、あと実行委員会のメンバーの、本日来られなかった方、あと 20 年間の間に多くの皆様に関わっていただいて今日を迎えることができたということで、本日映

像に残していただいている関係があるので、私も漏れがないように原稿を作ってまいりましたので、読み上げさせていただきたいと思います。

この公募活動は、都心から近くにあり、自然豊かな憩いの場として水と緑に囲まれ、この地域を多くの人に知っていただき、足を運んでいただければと、深大寺地域活性化を目的に、2003 年春、桜の時期に神代フェスタということでスタートをいたしました。

この事業をきっかけに、イベント型の地域活性化と異なる手法で新たな展開を模索し、より幅の広い、そして継続性の高い方法はないかと考えたことが、この公募事業が生まれるきっかけであります。運営している我々は、それぞれがお勤めの方から自営業の方、バラバラの業種で仕事をする集まりです。

共通していることは、ここ調布がとても好きで、この地域のことを活かした何かしらの事業ができないかという想いだけで 20 年間続けてきたというところがございます。ここまで事業を続けることができましたのは、本堂をお借りし、第 1 回の中から変わらずご協力をいただいております深大寺、そして深大寺奉賛会、深大寺そば組合、調布市など、多くの地元の皆様並びに最終審査をしていただきました一流の作家の先生の皆様、アカデミー愛とびあの皆様や事前審査員の皆様、大変ご支援をいただきいただいた、ご協力の結果でございす。ありがとうございます。20 年間で 6984 作品、最年少は 13 歳から、最高齢は 86 歳の応募があり、始めは近隣からの応募が多かったのですが、後半は海外からも毎年のようにどこからか送られてくる。そして全国各地から作品が送られるようになりました。

最終回の第 20 回時には 600 作品を超えました。本当にありがたい感謝でいっぱいでございます。私の中で特に思い出に残っていることは、初めて小説の選考会。1 次審査会を通過した約 20 作品が事前に先生に送られるのですが、その最終審査会の時に先生にお送りした原稿が、皆さんの作品本当にひとつひとつ赤ペンで一行一行。これは何のことだろう？これが何を示しているんだろう？そんなことがこと細かく書かれていて、最終審査会の席ではそこがとても協議されるポイントでありました。そういう審査会というのはもちろん参加したことはありませんでしたので、その約 1 時間から 1 時間半ぐらいなんです、大変私自身は感激、感動し、これはしっかりと続けていけることだ、続けていかなければいけないことだというふうに強く感じました。

ほかに強く残っていることなんです、先ほど井上先生からお話がありましたけれども、受賞作品の選評を参考にされているであろう応募が多くなり、小説を書く皆様の少しお役に立てたのかなと、このように思いました。

それから、劇団より依頼があり、受賞作品をもとに演劇になった時。目標でありました映画化への一歩手前までは行ったんですが、ショートフィルムになった時。国立国会図書館から全作品を収蔵すると連絡が来た時、いわゆる読物から小説ということで認められたのかなというふうに思いました。

15 年の特別記念企画で今村翔吾さんがのちに直木賞を受賞されたことで、5 人全員が直木賞作家の作品を記念号として作れたこと。

そして井上先生の直木賞受賞。

小説を書くことがこの公募の事業のきっかけになり、その後も書き続けている方もいらっしゃると思います。報告を受けている限りでは、プロの作家になられた方、ご活躍されている方も多くお話を聞くことがあります。今まで我々は実行委員会で書くことはなかったんですが、我々、今度は実行委員会のメンバーはどんどん作品を作って、他の公募事業とかそういうところにも出して、実行委員会から直木賞を出るといいかなと思います。

最後になりますが、団体、企業、個人、行政、全ての皆様に感謝という言葉しか思いつきません。多くの皆様に支えていただき、大変お世話になりました。誠にありがとうございました。映画の街調布で生まれたこの事業で応募いただいた作品が、今後も様々な形で展開されるとともに、映画映像化につなげられるよう、実行委員会一同、そのようなお話があった時には可能な限りお手伝いをしたいというふうには思っております。

本日は寒い中、鼎談の方にお集まりいただきまして、誠にありがとうございました。以上でございます。ありがとうございます。

司会：以上をもちまして、本日のプログラムは全て終了となります。登壇者の皆様が退場されます。盛大な拍手でお送りください。